2023 年度事業報告書 目次

所長挨拶: 外国語教育研究所 2023 年度事業報告書発行にあたって ……岡田 圭子（1）

【2023 年度事業報告】

第 13 回公開講演会

「日本に複言語主義は必要か？―ヨーロッパとの対比で―」 ……報告: 浅山 佳郎 （3）
講演者: 境　一三（外国語学部特任教授、慶應義塾大学名誉教授）

研究例会

「獨協大学における日本語教育」 ……報告: 浅山 佳郎（14）
「獨協大学韓国語の歩み―日本の諸大学の韓国語関連学科設立とあわせて―」 …報告: 小宮 秀陵（18）
「日本における中国語教育の変遷」 ……報告: 明田川 聡士（18）

高等学校外国語担当教員との懇話会

第 13 回「高等学校外国語担当教員との懇話会」 ……報告: 渡邊 一弘 （20）

【研究所活動報告】

2023 年度研究員活動報告 …… （28）
2023 年度研究所活動報告 …… （40）
外国語教育研究所規程 …… （42）

＊本報告書内の職位に関する記述はすべて 2023 年度のものです。

所長挨拶

外国語教育研究所 2023 年度事業報告書刊行にあたって

外国語教育研究所　所長
岡田　圭子

獨協大学外国語教育研究所の 2023 年度事業報告書をお届けいたします。本研究所は 2023 年度に、公開講演会、3 回の研究例会、そして高等学校外国語担当教員との懇話会を主催いたしました。6 月の公開講演会では、慶應義塾大学名誉教授・本学外国語学部特任教授の境一三先生に「日本に複言語主義は必要か？－ヨーロッパとの対比で－」というタイトルでお話しいただきました。境先生には本研究所が設立されて間もないころに CEFR の理念についてお話しいただく機会があり、その際にお聞きした「CEFR と民主主義」のお話が強烈な印象を伴って記憶に残っております。このたびのご講演ではヨーロッパの複言語主義の緻密な調査に基づく知見を持って日本社会の複言語の可能性についてお話しくださり、今回もまた非常に興味深く拝聴しました。300 名近くの聴衆が耳を傾けた本講演は、本研究所研究員の浅山先生がきめ細やかにまとめてくださいましたのでぜひお読みください。

さらに、3 回にわたって行われた研究例会では、浅山研究員、小宮研究員、そして明田川研究員が獨協大学における日本語、韓国語、そして中国語教育を振り返ってくださいました。本学の豊かな外国語教育を振り返る貴重な機会となりました。

年度末には、高等学校の外国語担当教員と本研究所研究員が意見交換する「高大懇話会」が行われました。ラインデル研究員による「AI in the language classroom」という、今最もホットな話題ともいえる発表から始まり、高校と大学で外国語教育を担当している先生方が自由に意見交換をしました。この意見交換のようすは、渡邊客員研究員が緻密に記録してくださいました。

お忙しい中この事業報告書にご執筆下さった研究員の先生方に厚くお礼申し上げます。最後に、この報告書をお読みくださった皆様にお礼申し上げるとともに、今後も外国語教育研究所にご支援を頂けますよう、心からお願い申し上げます。

第 13 回　公開講演会

第 13 回 公開講演会

「日本に複言語主義は必要か？―ヨーロッパとの対比で―」

開催日時: 2023 年 6 月 17 日（金）13 時 00 分～15 時 00 分
開催方法: 対面および Zoom ウェビナーを使用したハイブリッド形式
1．基調講演
＜講演者＞
境　一三（外国語学部特任教授，慶應義塾大学名誉教授）
2．質疑応答
＜モデレーター＞
三谷 裕美（獨協大学准教授／外国語教育研究所主任研究員）
参加者数: 290 名

報告者: 浅山 佳郎

1 はじめに

本研究所は，2011年の設立当初から複言語主義を柱のひとつとしてきた。複言語主義としては比較的先進的な状況にあるのがヨーロッパである。今回の第13回公開講演会は，ヨーロッパでの複言語主義とそれがもつ日本社会への意義について，慶應義塾大学名誉教授・獨協大学外国語学部特任教授である境一三先生に依頼してお話をうかがった。氏の専門はドイツ語教育を中心とする外国語教育学であるが，同時にヨーロッパ各地の初中等教育機関を数多く調査され，複言語主義・複文化主義について精力的な研究，提言をされている。

特にヨーロッパでの具体的な地域事例について検討するとともに，そこから得られた知見が日本社会に適用可能であるのか，日本社会でどのように複言語主義が機能しうるかという問題についての議論を聞くことができたのは，きわめて有益であった。

講演の構成は，おおよそ，(1)問題の背景とCEFR，(2)複言語主義のあり方，(3)ヨーロッパでの実例，(4)日本での複言語主義の必要性，となっている。以下この構成にしたがって講演の内容を報告する。

2 講演概要

（1）問題の背景と CEFR

複言語主義の概念は，まずCouncil of Europeが出版した「Common European Framework of Reference for Languages（CEFR)」による。そこでは，

・ヨーロッパにおける多様な言語と文化の豊かさは価値のある共通資源であり，保護され，発展させるべきものである。また，その多様性をコミュニケーションの障害物としての存在から，相互の豊穣と相互理解を生む源へと転換させるために，主たる教育上の努力が払われねばならない。

・異なった母語を話すヨーロッパ人の間のコミュニケーションと相互対話を容易にし，ヨーロッパ人の移動，相互理解と協力を推進し，偏見と差別をなくすことは，ヨーロッパで使われている現代語をよりよく知ることによってのみ可能になる[1]。

という基本理念，すなわち様々な言語や文化こそがヨーロッパにとって宝であるという考え方が掲げてある。これは，Council of Europeという組織が，人権，民主主義の保護，社会的・法的規範の確立のための合意形成，共通の価値観の自覚促進を目指していることに基づく。

それはさらに以下の認識につながる。すなわち各個人は，地域や国といった重層的なアイデンティティをもちながら，その上に自分がヨーロッパ人だというヨーロッパ・アイデンティティを育むことが最も重要だという認識である。その背景にあるのは，EUの成立によって，職業人としてまたは教育を受ける学生として域内の移動が自由になったことが挙げられる。その結果，特に共通の言語教育政策が必要になり，欧州評議会は，CEFRという文書を作って，多言語・多文化環境のヨーロッパにおける市民の複言語能力・複文化能力の養成を最重要の課題とした。これが複言語主義の背景である。

（2）複言語主義のあり方

欧州評議会のサイトに掲げてあるMain objectives of the CEFRには「promoting plurilingualism and diversification in the choice of languages in the curriculum」と書かれている[2]。ここに「plurilingualism・複言語主義」が指摘されている。

複数の言語という意味では「多言語主義」という用語もある。多言語主義のほうはMultilingualismに対応する訳語で，Multiという接頭辞が使われ，複言語主義のほうはPlurilingualismでPluriという接頭辞が使われている。これにはさまざまな解釈や定義があるが，ここでは，多言語主義とは，特定の社会の中での異種の言語の共存，たとえば学校の中で複数の言語が別々に教えられている状態を指すと考えておく。一方で複言語主義とは，個人の問題であり，一人の人間の中に複数の言語が互いに関係を持ちながら存在し，

---

[1] Council of Europe, Language Policy Unit.（日本語版．吉島茂，大橋理枝ほか訳・編．2014.『外国語教育２　外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠　追補版』.朝日出版社；p.2（CEFR 1.2）

[2] https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/uses-and-objectives

それを社会の中で適宜使用できる状態を指すと考える。複言語主義はその意味で，一人の人の中に複数の言語があり，それらがない交ぜになって切れ目なく言語能力をつくっていると定義できる。

では複言語主義がなぜヨーロッパで必要なのか。ひとつは，ヨーロッパの一人一人はそれぞれフランス人，ドイツ人，スペイン人，イタリア人と違っており，しかもさらにたとえばイタリアの中のトスカーナの人かもしれない，シチリアの人かもしれない。しかし最終的にはみんながヨーロッパ人として平和な社会を形成するためには，そのヨーロッパとしてのアイデンティティを形成することが必要である。その背後では，統一経済圏になっていることによって人と物が往来し，その際に個人の中に複数の言語がお互いに関係を持ちながら存在していることが重要となる。

もうひとつは，ヨーロッパ人ではあっても，そのなかでそれぞれの言語，文化が個別性として存在する。他を否定するのではなく，異質な個別のそれぞれが共生できることが必要となる。それは国家レベルで考えても，もともとあった言語・文化と外から流入してくる言語・文化が共存，共栄することが求められている。こうした状況もヨーロッパで複言語主義が必要となる理由だと考えられる。

ここから複言語主義への視点を少し変えて考えてみる。欧州評議会が出版しているCEFRのガイドは，複言語主義には能力としての複言語主義と価値としての複言語主義の２つがあるとしている[3]。能力としての複言語主義とは，全ての話者に内在する，あるいは教育活動によって導かれて形成される２つ以上の言語を用いたり，学んだりする能力である。

それに対して，価値としての複言語主義とは，言語に対する寛容性を養い，その多様性を積極的に容認する能力である。これを意識することは，自分自身あるいは他者が使用する言語変種がそれぞれ同等の価値を持つことへの同意に結びついていく。重要なのは，複言語主義によって寛容性を養い，多様性を積極的に容認することである。自分の言葉が大事であるのと同じように，相手の言葉というのも大事だということを相互に認める。これが価値としての複言語主義である。

（3）ヨーロッパでの実例

以下ヨーロッパの実情を理解するために，２つの事例を見てみる。ひとつは地域アイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティがどのように育まれているのかという問題を考える実例であり，ふたつめは，移民との共存がどのように行われているかという問題を考える実例である。

ひとつめは，イタリアのトレンティーノ・アルトアディジェ州のボルツァーノ自治県におけるドイツ語話者とラディン語話者の例である。ボルツァーノ県は，一般的には日本で

[3] 欧州評議会言語政策局，山本冴里訳. 2016. 『言語の多様性から複言語教育へ―ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』. くろしお出版；pp.18-19

も南チロルとして知られている地域であり，ほぼドイツ語圏であるが一部にレト・ロマンス語のひとつであるラディン語の地域がある。2011年の国勢調査によれば，ドイツ語系が69%，イタリア語系が26%，そしてラディン語系が4.5%という割合になる[4]。ドイツ語系の住民とラディン語系の住民は，古くからこの地域に住む人たちで，特にラディン語系の住民は２つの谷に集住している。

ボルツァーノ県の公教育では，母語で教育を受ける権利が保障されており，言語別にドイツ語系の教育委員会，イタリア語系の教育委員会，ラディン語系教育委員会と３つに分かれている。ドイツ語系の人は第２言語としてイタリア語を学ぶが，その場合も母語の先生が必ず教えるという制度である。少数言語話者の言語権ということを考えると，ドイツ語母語話者は，イタリアという国家の中でのドイツ語母語話者の権利確保と地域アイデンティティの形成が教育の大きな目的となるが，ラディン語母語話者にとっては，イタリアという国家の中のドイツ語地域の中でラディン語を母語とする人々の権利とアイデンティティが教育の目標になる。すなわちアイデンティティがいろいろなレベルで重層的に構成されており，その中での言語権の保持が試みられているが，同時に地域アイデンティティは分断状態が続いており，これをどうやって橋渡しするかが問題となる

ふたつめは，ジュネーブ郊外の公立小学生での複言語・複文化能力育成教育の例である。ジュネーブ州の人口のうち40%を外国人が占める[5]。見学した地区では40ほどの言語が話されており，フランス語に次いでポルトガル語やスペイン語が比較的多いとされる。そして小学校にフランス語が話せない児童が入学した場合は，受入れのための集中授業が行われ，入学した日から1年間，集中授業が行われる。

ジュネーブ州での複言語・複文化教育は，EOLE（Education et ouverture aux language à l'école）という名前で教授法や教材が開発されている。これはフランス語でいう Éveil，目覚め教育に相当し，子供たちの目をどうやって開かせるかが目的となる。そこでは必ずしも言語そのものができるようになることが直接的な目的ではない。むしろ言語の多様性や言語の仕組みそのものに自律的に気づくことが重要であり，その中には，学校教育の最初の段階で母語と距離を取るといったような機序も含まれている。

具体的に見学した授業では，『赤ずきんちゃん』を利用したアクティビティが行われていた。そこでは様々な言語で書かれた『赤ずきんちゃん』の本が使用され，どれがどの言語で書かれているのか，それがどうやって分かるかなどを話し合い，多様性に気づくという活動が行われている。さらに母語話者である生徒に各言語の『赤ずきんちゃん』を朗読させ，それを聞いてみんなで拍手をするといったことも行われていた。

先に述べた能力としての複言語と価値としての複言語という側面で言えば，南チロルのケースは，生活上，複数の言語能力が要求されるので，能力としての複言語主義の重要度

[4] https://astat.provinz.bz.it/downloads/Siz_2021-eng(7).pdf　p.15
[5] www.geneve-int.ch/de/fakten-und-zahlen

が高いと考えられる。例えばラディン語地域で教員になるためにはイタリア語・ドイツ語ラディン語の３言語の試験に合格になければならない。一方，ジュネーブのケースでは，多様な言語・文化の背景を持つ人たちが共存している地域に様々な文化的・言語的背景を持った移民が来て教育を受けている。そういうところでは互いを尊重しコミュニティを形成するために，価値としての複言語主義というのがより大きな意味を持つのではないかと思われる。

（4）日本での複言語主義の必要性

日本の状況は実質的な移民国家だと思われる。OECDのデータをもとに，流入外国人の多い順にみても，2018年で日本は外国人流入者数が４番目に多く，これはコンスタントに続いている[6]。日本は人口が多いので，人口総数比では２％強にすぎないが，国際比較でいうと決して流入者が少ない国ではない。

さらにこれを地域別でみると，一番多いのが26％のベトナム人，次いで中国人23％，フィリピン人11％，ブラジル人が7.8％，ネパール人が5.7％などなどで，英語を母語とする人たちまったくは一部にすぎない[7]。ここから日本社会の多言語・多文化化ということを見ると，様々な言語・文化的バックグラウンドを持つ人々の流入は，日本社会の急速な多言語・多文化化を推し進めてはいるが，それは日本社会の英語化ではない。

にもかかわらず，初等・中等教育では実質的に英語しか選択肢がない。外国語イコール英語という幻想を抱かせ，他の言語，他の文化圏への目は覆われてしまう危険性が高い。これは複言語的状況ではなく，多言語的な状況である。日本の英語教育というのは日本語教育と切れており，自分の中で何か別々のものとして存在している。さらに言えば，それは実際には Double Monolingualismでしかない。

これに加えて，2009年のユネスコの消滅危機言語の発表によれば，消滅危機言語のリストの中に日本で話されている８つの言語，アイヌ語，八丈語，奄美語，国頭語，沖縄語，宮古語，八重山語，与那国語が含まれていることを含めて考えるなら[8]，日本の中にある多言語・多文化に目を開く教育が必要ではないかと考えられる。子供一人一人が複言語主義を身につけること，特に他者を尊重する，他の言語・文化を尊重する姿勢を持つことが重要となる。その根本にあるのは全ての言語・文化は等価であるという考え方である。

先述した複言語主義の２つの分け方から言えば，初等・中等教育においては，能力としての複言語主義も重要ではあるが，価値としての複言語主義により重点を置くべきである

---

[6] OECD (2023), "Inflows of foreign population into selected OECD countries: Thousands", in *International Migration Outlook 2023:* , OECD Publishing, Paris, https://doi.org/10.1787/fd1e23aa-en.

[7] 厚生労働省（2021）「外国人雇用状況」の届出状況まとめ　https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/000887554.pdf

[8] UNESCO（2010）. *Atlas of the world's languages in danger.* https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000187026 ; Map22

と思われる。大学における第２外国語教育というのも，やはりこの点を意識した教育にすべきである。

何よりも外国語，異言語を学ぶと，自分がエトランジェ，異人であるということに否応なしに気づかされる。その体験が最も重要である。学習対象が英語の場合はそれが希薄になる。世界中どこに行っても英語を話すという均一的世界の中で生きているように感じられるからである。違う言語に触れたときに自分と違うと思う，その異質性を意識することが最も大切ではないか。

そのことを逆側に投射すると，今，日本に来ている人たちも自分が感じるような心細さというのを感じながら日本語を学んだり，日本で仕事していることに思いをはせることができる。互いにエトランジェである可能性を前提に共存するすべを学ぶべきであろう。

日本の現状を考慮するに，複言語主義は日本社会において一定の意味を持つと考えられる。特に価値としての複言語主義を念頭に置いた多様性を重視した教育の価値が高まっていくのではないかと考える。

3 質疑応答

質疑応答は，オンライン参加者用のメッセージ機能と対面参加者用の質問用紙の２種を使用し，そこから境氏がいくつかを選択して回答するという形式で行われた。数多くの質問が寄せられたが，紙幅の都合から，それらのうち一部を抜粋して報告とする。なお実際の発話は丁寧体の文体が使用されるが，この報告の一貫性を考えて，普通体の文体に書き直して掲載する。

質問　複文化主義についてはヨーロッパの枠を超えて探求する価値のある理念だと思うが，一方で，欧州評議会のヨーロッパの枠組みには，グローバルサウスに対する優位性を持ち続けたいという欲望が感じられる。これについてうかがいたい。

境氏　そのとおりだと思う。これはEUにしろ，それからそのほかの欧州評議会というような国際機関にしろ，ヨーロッパ人のための政治的な枠組みである。それはヨーロッパ人がよりよく生きようとするための枠組みであるから，いわゆるグローバルサウスに対して優位を保とうとするのは当然だろうと思う。

ただし，私たちがここから何を学べるかというのはまた別の問題である。ここから私たちの現場に引きつけて，どういうことが学べるかというのが私たちにとって一番重要なことだろうと思われる。

そういう点で，どろどろとした現実はどこでもあるが，やはり私たちが日本，東アジアのコンテクストで理念的に生かせる部分は生かす。無理やり何かをやらなきゃいけないという考え方ではなく，できるところをやっていきたい，やっていこうというふうに思う。

質問　EOLEについて，言語への目覚めという実践そのものは有意義だと思う。ただし，小

学校でいろいろな言語があると認識しても，中学校以降で大言語しか学ばない制度だと，結局いろいろあるが学ぶ価値があるのは大言語だけという刷り込みにつながってしまう隠れたカリキュラムが危惧される。この問題についてうかがいたい。

境氏　私もそれを非常に危惧する。結局これは，子供たちが変わるというよりも，まず大人が変わらなければいけない問題である。しかしなかなか大人は変えられない。私も大学で何十年もいろいろな活動をやってきて，同僚はなかなか変わらない。その意味で，今私は，学生や生徒たちに希望を持って一緒に学び合おうとしている。

時間はかかるはずである。ヨーロッパのCEFRができるまで短く見積もっても30年は準備している。日本が全体としてまだできていない現状から考えると，相当の時間がかかる。制度としても結局英語に後続するのはドイツ語，フランス語，中国語といった大言語であり，韓国語もポップカルチャーとして大言語である。現実の問題としてある意味ではしかたのないことであるが，大言語を相対化する視点というものを教育できているかどうかということが一つの鍵になるのではないかと考える。

質問　スイスの言語状況についてもう少しご教示願いたい。

境氏　スイスは州がもともと独立国で，あくまでも盟約，条約によって一つの国家としてまとまっている。よって教育政策もそれぞれの州によって決まっていく。ただ近年の流れとして，ドイツ語を母語とする州ではフランス語をやるよりも先に英語をやるという流れが非常に高まっている。特に都市部では金融がきわめて栄えており，実利的な観点から英語を先にやったほうが自分の子供たちには有利になるんだろうという保護者の判断がある。それが投票行動につながって，英語を教育するという政策に賛同者が多くなっている。

こういう問題を考えると，当然のことながら実利を否定はできない。しかし一方で実利的なことを抑えつつ，同時に長期的に考えたときにどういう理念で政策を進めていくかという二段構えが必要であろうと思われる。

複言語という理念と経済的実利という問題に関して，一例を挙げる。フランスのアルザスでは1970年代になってアルザス語がフランスの国家の地方語として認定される。それによって教科教育も地方語であるアルザス語で行うことが可能となる。しかしアルザス語というのはドイツ語の方言であり，実際にアルザスの子供たちがアルザス語で教科教育を受けるとすると，教材はドイツ語の教材をドイツやオーストリアから輸入して使うことになる。こうして，アルザス語復権のための運動は，家庭内でアルザス語をしゃべる家庭が少なくなり，アルザス語が残らず標準ドイツ語が残るという結果になっている。

複言語という理念と経済的実利と，両者の複雑な関係のなかで，しかし複言語の理念が語り続けられるべきかと考える。

質問　日本で子供たちに複数の言語に目を開かせるような教育をしているところはあるか。

境氏　大阪の守口市の公立小学校で，子供たちに複数の言語・文化に触れさせるという教

育をしている先生がいる[9]。あるいは私立の学校でいうと，横須賀学院でも興味深い教育の試みが行われている[10]。子供たちに様々な言語・文化に触れるような活動をしているので，私もそういった学校に出前授業に行って，子供たちと一緒にドイツ語の歌を歌ったりしたことがある。

小学校で制度的に取り組まれている「外国語活動」という枠組みは，本来自由度が高いはずである。しかし現場では何を活動していいか分からず，文科省が出したパンフレットを使って一応英語教育の入り口を指導することになる。それよりも，正面から複数の外国語であるということをうたっている上に述べた学校での実践の方が，本来の意図にそぐうのではないか。

質問　対話の際に，相手の第１言語に合わせて無意識に言語を替えられる場合，それは複言語的であると言えるか。

境氏　複言語の現れ方の一つである。無意識か意識的かにかかわらず，相手の第１言語に合わせるということ，またもうひとつ重要なのが，相手にも合わせてもらう要求をするということ，こうしたネゴシエーションができる力をつけることは非常に重要である。

ある程度で会話が進まなくなったら，その先に片言でも別の言葉に切り替えて，相手が分かるか様子を見ながら会話を進める，もしくは相手がこちらが分かりそうな言語を使用するのを促すといった態度は，養うべき能力である。

相手がある言語の話者だからそれに合わせなければならないというのは，窮屈で望ましくないと私は思う。私たち日本人の美徳として相手に合わせるといった風がある。しかしそれは必ずしも対等な関係ではない場合が多い。対等な関係に立つためには，どうやって自分が相手から引き出すかという，ある意味のしたたかさを身につけることが必要となる。これも複言語能力・複文化能力のひとつである。

質問　ボルツァーノ県の第２言語教育では３つの言語のうち優先されている言語はあるか。それとも複言語の考えに基づいて３つの言語に優劣をつけずに同時選択もしくは自由に生徒が第２言語を選ぶのか。

境氏　私の知る限り，イタリア語圏の学校の子供であれば必ずドイツ語を学び，ドイツ語圏の学校であれば必ずイタリア語を学ぶ。ラディン語系の学校の場合は，この２つを必ず学ぶ。よって，ラディン語系の学校のほうが負担が大きい。それは選択の権利ではなく，彼らにとっては，必須の授業としてやらなければならないものである。

ラディン語地域の学校に行く限りはラディン語ができなければならない。ラディン語で社会科なども講ぜられる。それは相当に大変な学習となる。ふだんから２言語で勉強することだけでも大変なのに，それプラス自分たちの地域の言語ではない国際語も学ぶ。よっ

---

[9] 大山万容,北野ゆき,濱田隆史. 2020. 「「コトバハカセ」を用いた小学校外国語教育での複言語教育」.『複言語・多言語教育研究』8；55-70

[10] 阿部志乃. 2017. 「チョコレート・プロジェクトーチョコレートから世界の現実に目を向ける力を養成する外国語学習－」.『複言語・多言語教育研究』5；69-78

て学習時間の中に占める言語教育の時間が高くなる。

この問題は私たちにとって考えどころで，私たち日本人はそういう労力を払わなくて済んでいるから，算数教育とか理科教育とか社会科教育を高いレベルで維持できる。複数の言語教育との一種のバーターとなる。

これは，結局これからの日本の立ち位置の問題と関わる。将来的に日本から移民労働者がたくさん外に行かなければならない状態になったら，当然のことながら様々な言語を学んで外に出てるという状況になる。ただ今の時点で言えることは，言語学習には相当の労力が必要だということである。

そのメリット，述べてきたような他者に目を開くとか，他者の価値を尊重するといったことがよりよくできるようになるという点まで含めて，教育として価値があると判断するのか否か，という問題である。最終的に決定するのは，納税者の投票による判断となる。どれだけそういった教育問題に関心を持つかということが，これからの私たちの社会を左右する大きなファクターになると考える。

4 おわりに

ヨーロッパにおける複言語主義の理念と実情がきわめてよく分かったうえで，自分たちはここ日本でどうあり，どうするかという問題が問いかけられる，すぐれて啓発的で有益な講演であった。

ヨーロッパの複言語主義についての話からは，なによりも，その複言語主義がヨーロッパ･アイデンティティに支持されることが前提となるという極めて本質的な指摘があった。ヨーロッパには，ヨーロッパとして歴史的に形成される一種の「等質性」のようなものがあり，それが人権や民主主義，そこからくる多様性への寛容主義としてアイデンティティを形成する。それがあるので，その中での個別の小さなグループのアイデンティティが確保しやすくなると考えることもできる。

とするなら，講演の後半がするどく問いかける日本の問題は，われわれがヨーロッパ・アイデンティティに相当する通域的な上位アイデンティティのなかに，日本の，あるいはさらに個別のさまざまな重層的なアイデンティティを構成できるかという問題となる。そうした重層性がなければ，日本というアイデンティティが上位化し，他の言語への寛容さを失うか，あるいは日本というアイデンティティだけが個別に存在し，共存できる他言語を失うことになる。今回の講演は，まさにそれが現代の日本に起きた，また起きている事態であることを認識させられるものであった。

獨協大学外国語教育研究所主催　第13回公開講演会
Institute for Research in Foreign Language Teaching, Dokkyo University

日本に複言語主義は必要か？
―ヨーロッパとの対比で―

境 一三氏
獨協大学外国語学部ドイツ語学科特任教授・
慶應義塾大学名誉教授

■日　　時：2023年6月17日（土）　13：00～15：00
■開催方法：対面形式およびZoomライブ配信（学内会場またはZoomでのライブ視聴にてご参加いただけます）
■場　　所：獨協大学東棟2階　E-202教室
■参 加 費：無料
■申込方法：事前申込制
獨協大学ホームページ「第13回公開講演会申込ページ」
またはQRコードよりお申込みください。
※申込みページにて対面参加またはZoom視聴をお選びください。
▲お申込みはコチラ
■主　　催：獨協大学外国語教育研究所
■モデレーター：三谷 裕美（外国語教育研究所主任研究員）

獨協大学
DOKKYO UNIVERSITY

獨協大学外国語教育研究所主催　第13回公開講演会

日本に複言語主義は必要か？ ―ヨーロッパとの対比で―

開催趣旨

欧州連合をはじめ多くの国際機関では、長年にわたり複言語主義が推進され、多様な言語を話す人々が共に生活するための指針となっている。新型コロナウィルス感染症の影響から脱して国内に多様な言語を話す人々がさらに増加し、彼らとの共生が喫緊の課題である今、日本がヨーロッパの先例から学ぶことは多いと思われる。

本講演会では、慶應義塾大学名誉教授で、現在本学外国語学部特任教授の境一三氏を講師に迎え、現地調査で訪れたヨーロッパ諸地域の言語使用と言語教育の現状を解説していただき、日本における複言語主義の意義と今後の言語教育や社会全体での取り組みについて参加者と共に考える機会としたい。

プログラム

12:30　受付・会場開始　※12:45 Zoom接続開始
13:00　開会
13:10　境 一三氏による講演（60分）
14:10　休憩（10分）
14:20　質疑応答（40分）（モデレーター：三谷 裕美　外国語教育研究所主任研究員）
15:00　閉会

<講師> 境 一三氏　獨協大学外国語学部特任教授、慶應義塾大学名誉教授

成蹊大学法学部専任講師・助教授、慶應義塾大学経済学部助教授・教授を経て現職。専門はドイツ語教育を中心とする外国語教育学。主著に『外国語教育を変えるために』（三修社、2022年、共著）、『多言語教育の意義とは？』（iudicium　Verlag、2021年、共編著）、「イタリア・南チロルにおけるCLIL―ドイツ語系学校への導入を巡って―」（『言語政策』16、2020年、共著）、『ことばを教える・ことばを学ぶ：複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）と言語教育』（行路社、2018年、共著）、『多言語主義社会に向けて』（くろしお出版、2017年、共著）など。

【参加までの流れ】

❶ 申し込む
獨協大学ホームページのイベントページ「第13回公開講演会」の申込URLまたはQRコードから申し込み（ウェビナー事前登録）をしてください。
▲お申込みはコチラ

❷ 確認メールを受信
ウェビナー事前登録ページで入力されたメールアドレスに自動送信されます。
＊対面参加の方：開催日当日、会場まで直接お越しください。
＊Zoom参加の方：ご参加いただく際に必要なURLが記載されています。事前にご確認ください。

❸ 開催1週間前および前日にリマインドメールを受信

❹ 当日
＊対面参加の方：東棟2階E-202教室にて12時30分より受付開始となります。
＊Zoom参加の方：12時45分よりアクセス可能となります。申込み完了メールに記載されているURLをクリックしてご参加ください。

❺ 講演会終了後、アンケートに回答

徒歩マップ

獨協大学
〒340-0042　埼玉県草加市学園町1番1号
東京メトロ日比谷線・半蔵門線直通
東武スカイツリーライン
「獨協大学前〈草加松原〉駅」
西口より徒歩5分

<連絡先>
獨協大学外国語教育研究所
TEL: 048-946-1845
FAX: 048-946-1846
メールアドレス: gaikokugo@stf.dokkyo.ac.jp
HP: https://www.dokkyo.ac.jp/research/amanoken/

獨協大学
DOKKYO UNIVERSITY

研究例会

2023 年度第 1 回（通算第 34 回）研究例会

獨協大学における日本語教育

開催日時: 2023 年 7 月 26 日（水）17 時 20 分～18 時 00 分
開催方法: Zoom ミーティング
発 表 者: 浅山 佳郎（獨協大学外国語教育研究所研究員）

報告者: 浅山 佳郎

0 はじめに

本年度の研究例会は，獨協大学における日本語，韓国語，中国語といったアジア圏の諸言語の言語教育を概観しようという企図のもとに計画された。浅山は 2003 年度に獨協大学に奉職してから，語学クラスとしての日本語を担当しない年度はあるものの，一貫して日本語教育セクションに所属してきた。

獨協大学で日本語教育に携わった教員が徐々に鬼籍に入られるようになり，ここで獨協大学における 30 年以上の日本語教育の経過を概観しておくことは，残された者の責務かと考え，本発表を担当する。

1 獨協で日本語教育が始まるまで

1980 年代の後半に獨協大学でも組織的な日本語教育が開始する。これは 80 年代に全国的にみていわゆる留学生が増加し,「語学の獨協」を自負する大学として，本学も外国語学部にドイツ語・英語・フランス語各学科とならんで日本語学科を設立させようという発想があったものと仄聞する。その意味で，獨協大学の日本語教育は，それをどのように大学内のカリキュラムとするかという試行の過程であるとみなすことができる。

同時に，語学教育全体の問題でもあるが，日本語教育は教授法が焦点化される分野であり，獨協大学の日本語教育もその問題が継続的に問われてきた過程であるともみることができる。というのも，日本語教育の歴史をきわめて単純にみるなら，教育の方法論の変遷がその基層にあると見ることができるからである。戦前の日本語教育でもたとえばグアン式への注視があったり，戦後も米国の日本語教育におけるいわゆる Army/Michigan Method が強く意識されたりした。

80 年代になると教授法としての機能主義への志向が強くなる。その 80 年代後半に獨協大学でも井口厚夫と中西家栄子の両氏が日本語教育を開始する。両氏はそれまで上智大学での日本語教育に携わっていた。そこでは元 Michigan 大教授である名柄迪が構造主義へ

の批判的検討を通じて機能主義的な学研の『Japanese For Everyone』を編集し，井口・中西両氏もその共著者に加わっていた。両氏が獨協で日本語教育を開始するときにも，この教科書を標準として採用している。

2 1999 年までの日本語教育

開始してから 90 年代までの日本語教育は，経済学部に入学する外国籍学生と各学部の帰国子女学生のための日本語科目と協定大学であるエセックス大およびデュースブルグ大のための日本語初級の特別クラスで行われていた。この段階でのこれらの科目は，大学の正規カリキュラムの外にある科目で，シラバスには掲載されない科目であった。

制度としては 「日本語課程」という一般カリキュラムとは別となる「課程科目」であり，別科という名称は使用されていないが，それに近似するものであった。しかもここで「課程」と呼ばれているものは，実質的には非常勤講師も含めた担当者の会議体のようなものであったと思われる。

科目名称としては「総合科目（日本語１）」と「技能別科目（日本語２）」が設定されている。前者は『Japanese For Everyone』を教科書としているが，聴解・読解・文法・作文を混在させたいわゆる「総合」クラスの概念によってデザインされており，その意味では機能主義に特化したというよりは，方法論的に妥協的であった。

3 2015 年までの日本語教育

1999 年に外国語学部に言語文化学科が増設され，井口・中西両氏はそこに所属する。ここから日本語教育は大学内のカリキュラムとして位置づけられるプロセスが進む。増設された言語文化学科が外国籍学生の受け入れ学科となったことで，ここから獨協大学の日本語教育は言語文化学科のそれと他学部学生のための全学の日本語教育に分岐する。

全学用の日本語教育は，各学部のいわゆる第 2 外国語の外国籍学生のための読み替え科目であり，その担当教員も専任教員を除外すると外国語学部の共通科目担当非常勤教員であったが，外国語学部の共通授業科目内には日本語科目は存在しなかった。これが全学カリキュラム再編時に正規科目化され，2008 年度から「外国語部門」の１つとして位置づけられる。教員も 2007 年度に言語文化学科を改組した国際教養学部が，すべての全学カリキュラム担当非常勤教員の所属と学部となり，不整合が解消された。

逆に言語文化学科科目としてはカリキュラム化が少し遅れ，2010 年度になってやっと外国籍学生・帰国学生専用の「日本語科目」として正規のカリキュラムに位置づけられる。それまではシラバスも別冊子として用意され，外国籍学生と帰国学生を教務的に特別扱いとし，言語文化学科の正規の科目の代替科目として日本語科目を履修させていた。

全学用の科目としての「日本語」科目は不整合の問題を抱える。というのも入学条件が日本語能力検定試験または日本留学試験のスコアであるので，語学学習者としてはすでに

修了に近い超級者に相当する。外国籍学生は入学直後から一般の日本人学生と一緒に日本語で講じられる基礎演習や概論科目などを履修する。しかし同時に学則上は第 1 外国語が必須であるので，それに相当する日本語科目を履修しなければならない。これはいわゆる語学の科目としては，並行して語学終了後に履修する科目を履修しているのであるから，実質的には無意味となる。上級および超級のクラスとしての語学教育の方法論が不在であることが引き起こす不整合の問題である。

一方で言語文化学科の外国籍学生は，秋学期入学者を中心として日本語学習としてはいわゆるゼロスタートの学生であるので，上述した不整合問題は存在しない。言語文化学科では週 14 コマの日本語科目を 2 年間集中して履修し，その後に学科の日本人学生と同様のコースに乗るというカリキュラムであった。これは当時の文科省も計画していた留学コースであり，日本語能力が不足していても学習能力の高い学生に入学許可を出し，日本語教育を補充したうえで，4 年間で日本語習得と学士号取得を行うというものであった。

そこでは初級レベルに相当する第 1 学期で機能主義的な教育を行うとともに，第 2 学期以降はいわゆるアカデミック日本語の教育を行うプログラムになっており，方法論的にはある意味で理想的なデザインであった。

4 現在の日本語教育

2015 年度末に中西氏が退職され翌年から新しい専任教員を迎えた。この前後の時期から獨協大学の日本語教育をとりまく環境が変化する。その最大のものが外国籍学生の減少であり，経済学部への中国からの外国籍学生が減少するとともに，言語文化学科への秋学期入学外国籍学生も減少した。後者は学部の方針であるとともに，入国管理の方針でもあった。特に上述した理想的なデザインに相応する外国籍学生は，獨協大学ではなく国立系の大学を志望する。

よって現在は，英米独の交流提携校からの 1 年間の交換学生を中心とする日本語教育が中心となり，同時に英語で開講される日本研究の諸科目を履修するか，あるいは語学終了後にインターンシップに参加する学生が多くなっている。

5 全体のまとめ

獨協における日本語教育には，日本における日本語教育の縮図のような問題を見ることができる。そのひとつは，後期中等教育から高等教育にかけて，日本語科目をカリキュラムの中にどのように位置づけるかということであった。

さらに問題なのは，もうひとつの問題で，教授内容よりも教授方法が焦点化されることであると思われる。方法の焦点化は、それが主張するような明瞭な輪郭をもったクラスとしては実現されない。実践的には曖昧で妥協的な，さまざまな要素を組み合わせた授業活動が行われる。単純化していえば，構造主義的な反復練習と文章テキストの読解と制御さ

れた言語行為の実行という授業である。

報告者の私的な見解を述べると以下のようになる。もし何を教えるかが不明ならば，学生の自立的な実践に委ねるために，学生を「教室授業」から解放すべきである。授業ではない音声的なコミュニケーションを実践することを奨励し，学生からのそれについての「報告」を教員が「評価」するという形式の語学が，今後の大学における日本語教育として求められるのではないか。以上を抑え気味に提言して報告とする。

2023 年度第 2 回（通算第 35 回）研究例会

獨協大学韓国語の歩み

―日本の諸大学の韓国語関連学科設立とあわせて―

開催日時: 2023 年 11 月 22 日（水）17 時 20 分～18 時 00 分
開催方法: Zoom ミーティング
発　表　者: 小宮　秀陵（獨協大学外国語教育研究所研究員）

2023 年度第 3 回（通算第 36 回）研究例会

日本における中国語教育の変遷

開催日時: 2024 年 1 月 24 日（水）17 時 20 分～18 時 00 分
開催方法: Zoom ミーティング
発　表　者: 明田川　聡士（獨協大学外国語教育研究所研究員）

第 13 回
高等学校外国語担当教員との懇話会

第 13 回「高等学校外国語担当教員との懇話会」

開催日時: 2024 年 2 月 17 日（土）13 時 00 分～15 時 00 分
開催方法: Zoom ミーティング
参 加 者: 15 名

【高等学校外国語担当教員】
岡見 英一（獨協中学高等学校）
後藤 範子（元埼玉県立不動岡高等学校）
鈴木 冴子（埼玉県立上尾鷹の台高等学校）
祖谷 侑沙（埼玉県立伊奈学園総合高等学校）
能登 慶和（獨協医科大学/東京都立北園高等学校）
廣瀬 瞳（埼玉県立坂戸高等学校）
松田 雪絵（埼玉県立伊奈学園総合高等学校）
山崎 夏絵（埼玉県立越谷南高等学校）

【外国語教育研究所研究員】
浅岡 千利世（所長）
三谷 裕美（主任研究員）
岡田 圭子
Marco RAINDL
辻田 麻里（客員研究員）
渡邊 一弘（客員研究員）
市原 ひかり

報告者: 渡邊 一弘

「連携」と「複言語」という二つの研究テーマを掲げる外国語教育研究所では、外国語教育に携わる高等学校教員と大学教員が高大連携のあり方について議論する「高等学校外国語担当教員との懇話会」（通称：高大懇話会）を毎年 2 月に開催している。第 13 回目となる今回の懇話会は、2 月 17 日（土）の午後に Zoom によるオンラインで開催され、埼玉県と東京都の高等学校で、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語を教えている教員 8 名と、外国語教育研究所研究員 7 名の合計 15 名が参加した。

冒頭岡田圭子所長より挨拶があり、参加者による自己紹介の後、三谷裕美主任研究員の司会により懇話会が始まった。第 1 部では話題提供として、マルコ・ラインデル研究員よ

り「AI in the language classroom」と題する発表があった。第 2 部では、第 1 部で提供された話題を中心に、ラインデル研究員との質疑応答を交えながら、参加者全員で意見交換を行った。

＜第 1 部　発表「AI in the language classroom」　マルコ・ラインデル研究員＞

本発表では、外国語の授業において生成 AI をどのように活用し得るかを考察する。始めに発表者が AI に出会ってから授業で使用するに至るまでの個人的経験について触れ、続いて生成 AI の問題点と可能性を述べる。その後、発表者自身の授業で行った実践例と、他の研究者が行った AI 使用に関する調査結果を紹介する。

2022 年 11 月に Open AI が ChatGPT をリリースした。しばらくしてから自分でもアカウントを作り、その機能を試してみた。他の多くの人と同様、AI が生成する文章の流暢さに驚いた。これまでの授業のやり方は、はたして今後も成立するだろうか。外国語教師としてそう自問自答するとともに、AI が平然と虚偽の内容を出力することにも衝撃を受けた。

翌年の 2 月から ChatGPT を自分の授業補助として使い始めた。学生の作文の誤り訂正やテキストの難易度調整、単語リストの作成に役立てた。2023 年 5 月になると、大学から学生に向けて注意喚起がなされた。ChatGPT を使用したレポートや課題は、成績に悪影響を与える可能性があるという。他方で 7 月には、教務課が教員に対し、AI の使用や対処方法をシラバスに追加するよう促した。教育の現場において、生成 AI の存在が次第に公然のものとなっていった。国際会議に参加すると、AI に関するセッションはどこも盛況で、皆が AI の教育に対する可能性について前向きだった。9 月には大学のドイツ語スピーチコンテストで、ChatGPT が生成した文章の使用を認めるという新しい試みも行われた。

ChatGPT は、多くのテキストデータを解析し、確率に基づいて次に来る言葉を選んで文章を生成する「大規模言語モデル」だ。プロンプトと呼ばれる指示に応答し、人間との対話が可能である。また、音声出力などさまざまな機能も備えている。

生成 AI にはいくつかの課題がある。従来の宿題やレポートの形式が無効化される恐れや、学生が独立した思考力を失う危惧が指摘されている。外国語学習においては、ChatGPT が多くの学生よりもはるかに優れているため、学習意欲の低下が懸念される。AI が生成した内容にはハルシネーションと呼ばれる虚偽情報が含まれることがあり、その質を評価することも容易ではない。著作権やデータセキュリティ、プライバシーに関する課題もあり、言語的・社会的不平等も問題視されている。

しかし、AI には大きな可能性もある。メディアリテラシーや批判的思考がますます重要になる中で、学生はメディアを効率的に使いこなす能力を身につける必要がある。また、AI は学習者に個別のフィードバックを提供し得るし、会話のパートナーにもなり得る。教師にとっても、ChatGPT は教材作成や課題評価に役立つツールとなるだろう。

生成 AI の問題点を踏まえつつ、その可能性を前向きに捉えようとするならば、AI ツー

ルを使った学生の成長を評価する方法について再考する必要がある。プロセスを評価し、学生が長期にわたって能力を向上させていく過程に焦点を当てるべきだ。

続いて、発表者が授業で ChatGPT を使った実践例を三つほど紹介する。1 年生向けのクラスでは、ごく少人数の学習レベルがばらばらな学生たちを対象に、ドイツ語の流暢さや語彙、文法の正確さを向上させるために ChatGPT を使ったライティング活動を導入した。学生はまず自分の経験についてドイツ語の文章を書き、それを ChatGPT で訂正し、訂正前後のテキストを比較した。特に、学生には文章の中で学びのポイントを三つ挙げることを求め、他の学生との相互フィードバックを通じて理解を深めていった。

2 年生向けのクラスでは、大学のプラスチック廃棄物削減についてドイツ語で提案書を作成させる課題を実施した。学生はパートナーと共同で文章を作成し、それを ChatGPT で訂正したが、すべての訂正を受け入れるのではなく、どの訂正を採用するか学生自身が判断するようにした。学生は ChatGPT の提案を批判的に吟味し、訂正が正しいかどうかを自ら判断する力を養った。

ゼミでは、ChatGPT を使って授業外での自己学習を支援する方法を検討した。学生はまず ChatGPT を使った学習ストラテジーを考案し、実際にそれを試すタスクを行った。クイズ形式でドイツ語の文法を学んだり、会話のロールプレイをしたりするなどの活動を通じて、学生は自発的に学びを進めた。また、生成された文章を ChatGPT に評価させ、その結果を分析することで、プロンプトを効果的に使う技術を学び取っていった。

最後に、外国語学習に生成 AI を導入するにあたって示唆的な、ある小規模な事例研究を紹介する。調査対象は日本の大学でドイツ語を学ぶ学生である。研究の目的は、生成 AI（主に ChatGPT）を使用して学生がテキストを改訂する際、どのようにフィードバックを受け入れ、修正し、拒否するのか、またその過程でどのような「気づき」が得られるかを観察することであった。

学生にまずドイツ語の文書を書かせ、次に ChatGPT を使いながらその文章を修正する課題を与えた。2 人の学生のインタビューデータを分析したところ、AI の使用方法に顕著な違いが見られた。最初の学生は主に ChatGPT を翻訳ツールとして利用し、訂正作業も AI に依存して行っていた。一方、2 人目の学生は AI を部分的に使用し、訂正のすべてを AI に頼るのではなく、辞書など他のリソースも併用し、より多くの学びの機会があったとされている。

この研究結果が示唆しているのは、修正されて最終的に出来上がった文章そのものが学びの証ではないということだ。たとえ AI によって文章が改善されたとしても、その改善作業において学生がどれだけ主体的に関わり思考していたかが重要である。単に AI のフィードバックを受け入れるだけでは、深い学習が行われたとは言えないだろう。

＜第 2 部　質疑応答と全体討議＞

第 2 部では、ラインデル研究員の発表で提起された論点をめぐる質疑応答を中心に、参加者たちがそれぞれの教育現場において日々行っている実践を踏まえながら、AI ツールの使用状況や今後の活用可能性について自由に意見を交換した。議論の内容は、DeepL や ChatGPT などの AI ツールが授業や学習にどのように影響を与えるか、その利点や問題点、さらには導入に伴う課題など多岐にわたったが、以下ではそれらを四つのトピックに分けて紹介する。

1. AI ツールの教育的有用性

高校・大学を問わず、参加した教員の多くは外国語教育における AI の活用に関心を持ち、少なくとも個人レベルでは自ら情報収集や試行実践をしているという報告が目立った。ただし、第 1 部における AI 活用事例の紹介を受けてまず指摘されたのは、そうした事例の多くが中上級者向けの発展的な授業内容を想定したものである一方、日本の高等学校における第二外国語の授業では、ほとんどの場合初級レベルの生徒を対象としているため、AI ツールを授業で使う機会はそれほど多くはないという現状である。

しかし、今後の状況や教師の工夫次第では、AI ツールの使用が生徒の学習プロセスにおいて有用なものとなり得ると感じる参加者も多く、とくにライティング指導において生徒と教師の双方が恩恵を受けるだろうという意見が上がった。また、生徒が AI ツールを使って自分で文章を推敲できるようになれば、教師が大人数の添削を行う際の負担軽減につながり、その分教師はより本質的なコメントに時間を割くことができるようになる。さらに、テスト問題作成において、ChatGPT に元のテキストを読み込ませ、異なるバージョンを生成させるアイディアも紹介された。

また、外国語の学習に強い苦手意識を持っている生徒や対人的要素に不安を感じる生徒にとっても、AI ツールのフィードバックが有効に働く可能性がある。発音矯正において人前での間違いを恐れる生徒にとっては、AI を相手に練習することで心理的負担が軽減するかもしれない。加えて、障害のある学生への合理的配慮が義務化される中で、AI ツールが学習を支援する役割も増えていくだろう。

2. AI ツールの使用に対する懸念

有用性の認識とともに、外国語教育の現場における AI ツールの使用に対する懸念も表明された。特に、AI が生成する文章や解答を生徒が無批判に使用してしまう問題が指摘された。例えば、大学の志望理由書の草稿として生徒が提出した文章に不自然さがあり、おそらく ChatGPT で書いたものではないかと疑わざるをえないケースがあった。また、プレゼンテーションのスクリプトの書き方を指導した際の経験として、次のような話があった。ある生徒は AI に頼り切ってスクリプトを書いていたために、自分の文章であるはずなのに使用している単語の意味がわからず、教師が文意を問うても「自分で書いたわけでは

ないので、わかりません」と白状する場面さえあったという。

語法的・統語的な正確性とは別に、文章の内容面に関しても、現在の技術水準では ChatGPT などの AI にはなおハルシネーションの問題（表面的にはもっともらしいが事実に基づかない情報を出力してしまう問題）が付きまとう。ライティングのトレーニングに使用するにしても、AI が生成する文章やフィードバックに対して批判的な眼を向け吟味する態度が生徒に備わり、また教師がそのような心構えを奨励しサポートする体制ができていないければ、外国語能力の伸長につながらないばかりか、AI ツールを使った活動が生徒の学習過程や成長を妨げるリスクがある。

この問題はさらに、AI ツールに依存することで、言語表現の本質を理解する力が失われるのではないかという懸念にもつながっていく。ある参加者は、自分の授業で過去に出題したレポート課題の指示文を ChatGPT に入力して、レポートの文章を生成してみたところ、あまりオリジナリティも面白みもない内容が出力されたという。他方で生徒や学生のなかには、AI が提供するそうした文章を模範のように捉えてしまう者もいるようだ。本来であれば、自分の体験を自分の言葉で表現した方が説得力もあり面白い文章が書けるはずであるにもかかわらず、AI が生成した文章の「無難なまとまりのよさ」に比べると見劣りしてしまうという不安を、かれらは感じているのかもしれない。しかしこの状況を放置すれば、生徒たちは自分の思考に潜むオリジナリティを発見し、それにかたちを与えるという、語学学習の場でこそ味わえる貴重な機会を失ってしまうだろう。それはひいては、自分で考える力や創造性の低下につながる恐れもある。

3. テクノロジー格差とインフラの問題

AI ツールの教育利用が孕む問題を踏まえつつ、今後はその可能性を見据えて有効に活用していこうと思っても、そもそも論として、現在の教育現場ではそのために必要な環境的・制度的整備がなされていないという問題も、とくに高等学校では切実なようだ。

公立校と私立校の間では、ICT リソースや AI ツールの導入状況において、大きな格差が存在する。ある公立高校では、ICT リソースが非常に限られており、パソコン教室を予約しなければならない状況や、生徒が使用する Chromebook を教師が授業のたびに教室まで運び込む手間があるという。またそういった ICT 活用に関する学校からの講習や指示が不十分ということもある。教師が個人的に授業で ChatGPT を活用しようと模索し始めた矢先、所管の自治体から「使用禁止」の指示が出たため、AI の活用はトーンダウンした。AI ツールの使用には期待がある一方で、教育現場におけるルールの整備が追いついていない現状が伺える。一方で、私立校では生徒全員がパソコンを持っている学校もあり、授業の中で ICT を活用することが日常的になっているケースもある。こうしたリソースの差が、生徒の学習環境や機会に大きな影響を与えていることが課題とされている。

また、生徒間の経済的格差が学習成果に与える影響も無視できない。貧困家庭やインタ

ーネット環境が整っていない家庭の生徒が AI ツールを使えない現実も存在する。こうした状況が学習成果に格差を生むことは避けられず、特に外国語教育のように個別指導が求められる場面では大きな問題となっている。テクノロジー格差を解消するための取り組みは、個々の教員や学校単位では難しく、国や自治体による対応が急務であるといえるだろう。

4. ガイドラインの必要性と今後の展望

AI ツールを授業に導入する際には、明確なガイドラインの整備が必要になってくる。これは ICT 活用一般についても言えることであり、高等学校では授業中のスマートフォンの使用を原則禁止しているケースが多いが、調べ学習など学習効果が見込まれる場合は例外的に認めるなど、メリハリの効いた活用を生徒たちにも習慣づけさせることが重要である。AI ツールについても、その適切な使い方を生徒に教えるために、どの場面で使用を許可し、どの場面では自分で考えさせるべきかを明確にする必要がある。

一方で、AI ツールの使用を過度に禁止することは逆効果になる可能性がある。また将来的に、生活や仕事の様々な場面で日常的に AI ツールを使う社会にもしなれば、学校においても AI ツールの使用が前提となる学習環境が求められる可能性があり、テストでも AI の使用を許可する時代が来るかもしれない。作文や論文執筆においても、AI を使って文章を修正するだけでなく、プロンプトを生徒に考えさせ、その過程を記録させることで、AI ツールの使用プロセス全体を評価する方法が提案されている。例えば、ラインデル研究員も紹介していたように、生徒にオリジナルの文章と AI が修正した文章の両方を提出させ、それらを比較させることで、生徒が AI に依存せずに自己修正の力を身につけられるような指導が考えられる。

以上の議論を踏まえると、AI ツールの発展と導入に伴い、教育現場における学習活動の再構築が求められていると言えるだろう。教師と生徒が対話を通じて AI ツールを使いこなし、AI が生徒の学習を補助する役割を果たす一方で、教師が生徒と直接向き合う時間も重要視されている。学習が教師と生徒のインタラクションによって生じるのだとすれば、AI はそのような作用を促進するコミュニケーションツールとして捉えられるべきかもしれない。これからの語学教師は「AI にできないこと」に対して自分たちがどう関わっていくべきかを模索していかざるをえないだろう。

おわりに

今回の高大懇話会では、ChatGPT などの AI ツールを外国語教育の現場でどのように活用していくか、紹介された実践例や参加者それぞれの経験と意見を踏まえ、活発な議論が交わされた。ともすれば生成 AI の画期的なパフォーマンスにばかり目が向かいがちだが、その教育利用にあたっては、学習のプロセスに焦点を当てた評価、ガイドラインの必要性、

インタラクションの重要性など、より広い視野で考察すべき論点も多い。今後の懇話会でも様々なテーマが話題になるであろうが、高等学校と大学の外国語担当教員が継続的に関心を共有し合うことで、より深い学びと絆をもたらす場としていきたい。

【研究所活動報告】

研究員活動報告

所長

浅岡 千利世 Chitose ASAOKA（外国語学部英語学科 教授）

担当言語：英語

【研究テーマ】

Narratives of language teacher educators: Through forming a collaborative community of practice of teacher educators

【2023 年度の活動報告】

[著書]

- Watanabe, A., Asaoka, C., & Fujii, A. (2023). Cultivating critical friendships through reflective practice: A community of teachers from different educational institutions. In A.V. Uchida & J.R. Rothman (Eds.), *Cultivating professional development through critical friendship and reflective practice: Cases from Japan* (pp.219-252). Candlin ＆Mynard.

[学会発表]

- Asaoka, C., & Watanabe, A. Co-constructing new professional identities through self-study research: Cases of foreign-language teacher educators in Japan. AILA World Congress 2023, August 2023.

[学会シンポジウム]

- Asaoka, C., J.R. Rothman, C.S. Rathore, & Watanabe A. Professional growth through critical friendships: Cases from Japan. KoreaTESOL 2023 International Conference, May 2023.

[その他の社会活動]

- 草加市花栗中学校学校運営協議員
- JACET（大学英語教育学会）学術交流委員

【2024 年度の予定】

[2024 年度前半]

2023 年度に収集したデータ（オンライン上でのフォーカスグループインタビューを通してみられた外国語教師教育者の成長に関するデータ、Google Forms 使用によるピアフィードバックに見られる教職課程履修者の成長に関するデータの２種類)の分析

[2024 年度後半] 学会発表および論文作成

発表予定学会： Association for Teacher Education in Europe, Annual Conference

投稿予定学会誌： 1. *Thematic Issue Bulletin*, VALS/ASLA, Issue 119

2. 「獨協大学外国語教育研究所紀要」　第 13 号

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

講演会や研究例会を通して日本における複言語教育の意味や本大学における英語以外の外国語教育について改めて考える機会を持てた一年でした。また生成 AI を活用した外国語学習の実践例を共有し、今後の外国語教育研究の道筋を考えるヒントとなりました。推進課の皆さん、三谷主任研究員、市原助手、そして研究員の皆さんのご協力のおかげで様々な行事を無事実施することができ、あらためて感謝いたします。

主任研究員

三谷 裕美　Hiromi MITANI（法学部法律学科 准教授）

担当言語：英語

【研究テーマ】

学校教育における英語教育を取り巻く状況の変化を踏まえ、学士課程入学までの英語学習歴と学士課程における学習者のニーズに基づいたカリキュラム開発を目指し研究を行う。小・中・高・大学の連携に加え、学士課程初期の一般学術目的の英語から学士課程後期の専門科目の学びで必要とされる英語への橋渡しとなる教育プログラムの在り方を研究し、具体的な授業計画・教材の作成、評価方法の検討を行う。

【2023 年度の活動報告】

[その他の社会活動]

- 第 13 回獨協大学外国語教育研究所公開講演会「日本に複言語主義は必要か？－ヨーロッパとの対比で－」（2023 年 6 月 17 日、講演者：境一三氏）モデレーター

【2024 年度の予定】

英語教育に関する学会・研究会への参加。

2022 年度から 2023 年度にかけて、英語発音授業の授業活動の改善に向けてパイロット・スタディーを行ってきたので、その結果を分析し、授業内容の見直しを行う。

一般学術目的の英語（English for General Academic Purposes）から専門科目で必要とされる英語への橋渡しとなる大学 3 年生向け探求型英語プログラムの開発に取り組んでおり、2024 年度はパイロット授業の実施および教育効果の測定、さらなる改善に取り組む。

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

AI 翻訳の一般的な使用が一気に拡大し、大学生が外国語に向き合う姿勢にも変化が表れはじめています。英文はまず Google 翻訳で概要を捉え、翻訳と英文を対照させながら細かいとこ

ろを読んでいく、という読み方をしている学習者が増えているようです。一方、日本語を外国語に翻訳する場合は､語学力が低い学生にとっては機械が生み出す外国語の文章が難しすぎて、正しく翻訳されているかどうかの判断がつかないという問題もあります。簡単な英文の読み書きならAI翻訳で十分、という時代に、英語教師は何を教えていくのか、これからしばらく教師は翻訳や文章校正などの生成AIをどう扱うべきなのか手探りしながら考えていくことになると思います。

研究員

浅山 佳郎 Yoshiro ASAYAMA（国際教養学部言語文化学科 教授）

担当言語：日本語

【研究テーマ】

（共同研究）中国における彝語，中国語，英語，日本語の複数言語学習の実態

（個別研究）現代日本語文法および訓読語文法

【2023年度の活動報告】

[論文]

- 「漢文訓読体日本語における「以て」の文法的記述」．獨協大学国際教養学部『マテシスウニウェルサリス』25巻1号
- 長尾直茂ほかとの共著「羅山随筆抄訓釈稿(十二)」『上智大学国文学科紀要』No.41
- 「日本語学習者の名詞修飾における過剰な「の」について」『獨協大学外国語教育研究所紀要』第12号

[その他の社会活動]

- 獨協大学語学教育研究所2023年度第1回研究会発表「獨協大学における日本語教育」

【2024年度の予定】

引き続き共同研究者である曲木威古氏と彝語についての学習と分析を進めたい。個人としての研究も引き続き日本語学習者の中間言語文法の分析と漢文訓読語文法の体系的な記述のための基礎資料の整備を進めたい。

【この1年、外国語教育についての雑感】

いわゆる「語学教育」が，本質的に何の「教育」なのか，再考したいと考える。

研究員

岡田 圭子　Keiko OKADA（経済学部経済学科 教授）

担当言語：英語

【研究テーマ】

外国語教育における高大連携

【2023 年度の活動報告】

[学会発表] 第 15 回日本リメディアル教育学会関西支部大会に参加し、リメディアル教育の歴史、意味、そして今後の展望について学ぶ機会があり、有意義であった。

[その他の社会活動]

- 埼玉県立不動岡高等学校外国語科「異文化理解」授業発表会・助言者

[講演]

- 埼玉県立不動岡高等学校 SSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業
  "Describing graphs in scientific presentations."
- 埼玉県立不動岡高等学校外国語科「異文化理解」授業
  "Speaking with confidence – giving a persuasive presentation -"

【2024 年度の予定】

- 科研費研究をまとめることに注力したい。
- 英語科教授法の教科書改訂を終了させるべく努力したい。

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

コロナ禍を経て、外国語への関心が低下しているという話があるが、私たち外国語教育に携わる者は、どのような状況のなかでいかに若者の外国語への興味をかきたてることができるのか、もっと考えるべきだと思う。外国語学習は生涯学習である。本学の外国語教育がいかに学生の生涯教育に影響を及ぼすべきか、また、及ぼせるのか、考えるべきだと思う。

研究員

中村 公子　Kimiko NAKAMURA（外国語学部フランス語学科 教授）

担当言語：フランス語

【研究テーマ】

1. 「フランス語科教科教育法」の授業内容と指導法の再考
2. 「（外国語の）教科教育法」担当者としての教師教育者に必要な資質と能力

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

2023 年度の「フランス語科教科教育法」の授業は、自分自身のこれまでのやり方を振り返り、それまで気づけていなかったことにやっと気づくことができた。私自身、これまで同じやり方を二十年以上も続けてきて気づいたことだったが、« Mieux vaut tard que jamais. »（遅くても全然しないよりは良い）だと実感した。模擬授業について、これまで教員側から模擬授業を

行なっていた学生に改善点や今後の課題などについて数々のコメントをしてきたが、実はそれらの多くの事柄については（模擬授業を実施した）学生自身が自分ですでに気づいてよくわかっていることだった、ということに気づけた。では、模擬授業の指導とは何なのか、教師の役割とは何なのか、この初心に帰った問いかけを自分自身にし続けた１年だったと思う。また、科目は違っても同じ教科を教える教員仲間とのミーティングは何物にも変え難い貴重な経験であった。私もまだまだ学生から教わることがたくさんあるのだと痛感した。

研究員

マルコ・ラインデル　Marco RAINDL（外国語学部ドイツ語学科 准教授）

担当言語：ドイツ語

【研究テーマ】

Developping interactive competence in German through virtual exchange

【2023年度の活動報告】

[学会発表]

1. *Looking for (inter-)action: LBC in Japan with apps based on the tandem principle*. Poster presentation on *EUROCALL 2023* (University of Iceland, Reykjavík, August 17th, 2023).
2. *Break-Out-Sessions als interaktionale (Frei-)Ra¨ume fu¨r Lernende im DaF-Unterricht* (co-authors: Czyzak, O.; Feike, J.; Lee, M.-Y.; Ohta, T.) Presentation on *Interaktion in DaFZ 2023* (Online-Conference, November 11th, 2023).
3. *Anforderungen und Potenziale eines multilateralen Masterstudiengangs DaF aus japanischer Perspektive* (co-authors: Kusamoto, A.; Ohta, T.) Presentation on *Internationalisierung der Lehrerbildung für Deutsch als Fremdsprache in Ostasien* – International Symposium at Kaohsiung University of Science and Technology, November, 17th, 2023).

[講演]

- *AI in the language classroom.* Impulse presentation at 獨協大学外国語教育研究所教育研究所主催の「*第13回高等学校外国語担当教員との懇話会*」, February 17th, 2024.

【2024年度の予定】

In 2024, I will engage in preparing the publication of the results presented in 学会発表2, and, based on the findings, plan and initiate a follow-up study to further analyze learner

interaction during virtual exchanges, possibly presenting first results at *Interaktion in DaFZ 2024.*

【この1年、外国語教育についての雑感】

In 2023, the major change in my teaching practice was brought about by the discussion about AI in education. After experimenting with ChatGPT mainly for class preparation and documentation, I tentatively introduced it to my classes as a potential source of feedback for students when revising texts at home, while discussing the importance of critical awareness and reflection concerning its output with them. On a general level, I felt that fostering learner autonomy in the use of AI-tools, again, was of major importance; and – the same as with other novelties during the last decades – the necessity of a close analysis of the specific affordances of new tools from a learners' perspective, while maintaining the primacy of pedagogy over mere technical feasibility.

研究員

小宮秀陵　Hidetaka KOMIYA　（国際教養学部言語文化学科　准教授）

担当言語：韓国語

【研究テーマ】

「複言語主義」の理念をふまえ、中・高・大の言語教育をより良いものにする方策を考える

複言語主義と韓国史像の多元性(2024年度課題名)

【2023年度の活動報告】

[学会発表]

- 外国語教育研究所（通称：AMANO外国語研究所）2023年度第2回研究例会「獨協大学の韓国語の歩み―日本の諸大学の韓国関連学科設立とあわせて―」(2023年11月22日), ZOOM

【2024年度の予定】

複言語主義をふまえ、韓国史像の多元性の議論との関係性を明らかにする。

【この1年、外国語教育についての雑感】

韓国語教育の環境は大きく様変わりしており、韓国語学習者からは、従来のテキストが追いつかないほど歴史・文化・言語に関する細かい韓国に関する質問が寄せられている。この質問は、韓国国内の事情だけでなく、在外コリアン社会に対するものもみられるようになったと実感している。韓国語の学習者の興味・関心が韓国の多様な姿に向き始めており、社会の多元的

性格を重視する傾向がより明示的になったのかもしれない。今後も複言語主義と多元的性格と重複する点を分析することの重要性を再確認させられた1年であった。

研究員

明田川聡士　Satoshi AKETAGAWA （国際教養学部言語文化学科　准教授）

担当言語：中国語

【研究テーマ】

① 他専攻の学生に対する第二外国語としての中国語教育

② 第二外国語としての中国語教育における高大接続／連携などをめぐる問題の解決

【2023年度の活動報告】

[著書]

①『中国語現代文学案内』　（共著）ひつじ書房（東京都）　2024年3月

②『千面李喬 ：2022李喬文學、文化與族群論述國際學術研討會論文集』　（共著）萬卷樓圖書（臺灣・臺北市）　2023年12月

③『新竹在地文化與跨域流轉 ： 第五屆竹塹學國際學術研討會論文集』（共著）萬卷樓圖書（臺灣・臺北市）　2023年11月

④陳又津『霊界通信（台湾文学セレクション５）』（単訳）あるむ（愛知県）　2023年10月

[論文]

①In the Era of Fading Testimonies: War Narratives in Wu Ming-yi and Higashiyama Akira's Works, SATOSHI AKETAGAWA, TAKU AKETAGAWA(Co-authored),AAS2024 Annual Conference 1-15 2024年3月

②東西文化の交流がもたらした中国語圏の現代文学史 ：【書評】梅家玲『文学的海峡中線 ： 従世変到文変』　中国21 (60) 2024年3月

③日本與臺灣文學的 “戰爭” 想像

文化記憶與歷史想像 ： 華文文學國際學術研討會論文集 1-10 2024年1月

④戰爭顯影 ： 吳明益與東山彰良小說中的歷史敘事

迴徑風景 ： 第四屆戰後亞洲文學與文化傳播國際工作坊2023論文集 2.4(p1)-2.4(p9) 2023年11月

⑤「新二代」作家が描く少子高齢社会のいま

陳又津『霊界通信（台湾文学セレクション５）』 333-340 2023年10月

⑥陳又津『跨界通訊』で描かれるその社会的背景

マテシス・ウニウェルサリス 25(1) 1-20 2023年9月

⑦「文學」與「歷史」的對話之旅 ： 重讀李喬《結義西來庵》

臺灣文學研究彙刊 30 63-90 2023年8月

⑧張貴興《野豬渡河》中的歷史與空間運用
經典內外 ： 華文文學與文化國際學術研討會論文集 1-13 2023年4月
[学会発表]
①In the Era of Fading Testimonies: War Narratives in Wu Ming-yi and Higashiyama Akira's Works ,Association for Asian Studies 2024 Annual Conference(Seattle, WA) 2024年3月
②日本與臺灣文學的 “戰爭” 想像
文化記憶與歷史想像 ： 華文文學國際學術研討會（於 立教大學，臺北大學中文系，元智大學中語系） 2024年1月
③日本における中国語教育の変遷
獨協大学外国語教育研究所2023年度第3回研究例会（於 獨協大学） 2024年1月
④戰爭顯影 ： 吳明益與東山彰良小說中的歷史敘事
迴徑風景 ： 第四屆戰後亞洲文學與文化傳播國際工作坊2023（於 獨協大學） 2023年11月
⑤21世紀台湾文学が描く戦争の歴史と記憶 ： 呉明益小説を中心に
東方学会2023年度秋季学術大会（於 日本教育会館） 2023年11月 招待有り
⑥中国語圏文学の輪郭 ： 台湾馬華文学における歴史と政治
⑦シンポジウムの座長およびディスカッサー
植民地体験、郷土と越境 ： 台湾の郷土文学は越境できるか（於 日本大学） 2023年6月
⑧張貴興《野豬渡河》中的歷史與空間運用
經典內外 ： 華文文學與文化國際學術研討會（於 立教大學，臺北大學中文系，元智大學中語系） 2023年4月
[その他の社会活動]
① 推薦語
陳芷凡，詹閔旭，謝欣芩，王鈺婷編『台灣文學的來世』 12-13 2023年11月

【2024年度の予定】
下記の研究テーマを引き続き継続的に研究していきたい。
①他専攻の学生に対する第二外国語としての中国語教育、②第二外国語としての中国語教育における高大接続／連携などをめぐる問題の解決

【この1年、外国語教育についての雑感】
2023年度は本研究所の定例研究会への出席がなかなかかなわず、たいへん申し訳なく感じております。ご迷惑をおかけしてしまったことを心よりお詫び申し上げます。外国語教育に関していえば、本学学生の語学学習に対する熱意は非常に高く、私自身にとっても大きな励みとなり、よい意味でいろいろなことを考えさせられた一年でした。24年度も勉学に熱心に取り組む

学生を失望させないためにも、過去の古い知識にとらわれないよう日々ブラッシュ・アップをはかっていきたいと考えております。

客員研究員

渡邊 一弘　Kazuhiro WATANABE（京都大学文学研究科特定研究員）

担当言語：英語

【研究テーマ】

多様化する能力観の時代における EGAP 教育の再定位

【2023 年度の活動報告】

[論文]

- 木村雪乃・ワイルド玲奈・渡邊一弘・西香生里・中村麗奈（2024).「対面・オンラインによる言語学習アドバイジング―獨協大学英語学習サポートルームの取り組み―」,『獨協大学外国語教育研究所紀要』, 第 12 号, pp. 67–86.
- 安間一雄・渡邊一弘（2024).「文法指導と誤り訂正は是か非か: Schulz 論文を読む」『獨協大学外国語教育研究所紀要』 , 第 12 号, pp. 87–103.

[学会発表]

- 木村雪乃・ワイルド玲奈・中村麗奈・西香生里・渡邊一弘（2023 年 7 月 8 日).「対面・オンラインによる言語学習相談の運営に関する実践報告」, 第 16 回 JACET 関東支部大会, オンライン開催.
- 渡邊一弘（2023 年 9 月 29 日).「「根源的できなさ」から「気分次第の探究」へ」, 第 3 回「ヒュームと WE」研究会, 日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業 学術知共創プログラム「よりよいスマート WE を目指して」（Smart WE プロジェクト）, オンライン開催.

[その他の社会活動]

- 東京都立大学大学院人間健康科学研究科 2023 年度大学院特別講義 「楽しく学ぶ Academic English」講師, 2024 年 3 月 8 日, 東京都立大学荒川キャンパス.

【2024 年度の予定】

引き続き、「多様化する能力観の時代における EGAP 教育の再定位」をテーマに調査研究を進める。とくに、プロジェクト型学習における他者との協働を通じた学習者オートノミーの発達を、AI 等のテクノロジーを含めた環境との相互作用の観点から考えていきたい。

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

外国語教育における生成 AI の使用に関し、この 1 年で非常に多くの研究結果が発表された。

自分自身も日常的に DeepL や ChatGPT を使うようになり、総論的な期待や不安から、より具体的な活用法や課題として考えることが多くなった。

客員研究員

辻田 麻里　Mari TSUJITA（国際基督教大学アーツ・サイエンス学科 准教授）

担当言語：英語

【研究テーマ】

- 教育の身体性：大学の授業における身体活動
- デジタル教科書によるリスニング・スピーキングの指導
- 第二言語の授業外学習促進のための教育リソース

【2023 年度の活動報告】

[学会発表]

- 青木浩幸・辻田麻里（2023 年 8 月）「英語科デジタル教科書における発音指導・学習支援機能についての横断的調査分析」外国語教育メディア学会第 62 回全国研究大会（LET62）（於 早稲田大学）

[学会参加]

- The Annual Conference of the Association on Higher Education and Disability, Equity and Excellence: Access in Higher Education (23 AHEAD). Portland, Oregon. (July, 2023)

【2024 年度の予定】

認知言語学の言語教育への応用

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

学修教育センターの担当になり、学ぶことが多い一年だった。教育支援では、生成系 AI についての方針や対策について議論を重ねてきた。学修支援では、2024 年度の「合理的配慮」の義務化を前に、アメリカの高等教育機関における特別支援教育の年次大会に参加し、学内のガイドラインを整備し、教職員の研修会を開いた。どちらも簡単に答えが出ない問題だが、より良い教育・学修を目指して取り組んでいきたい。

研究員

市原 ひかり　Hikari　ICHIHARA（外国語学部英語学科 特任助手）

担当言語：フランス語

【研究テーマ】外国語習得におけるホリスティックアプローチ

【2023 年度の活動報告】

[学会]

- 「アートがつつむ実践と研究へ　アート・ベース・リサーチの可能性」日本ホリスティック教育/ケア学会第 6 回研究大会シンポジウム、指定討論者、2023 年 6 月 24 日、大妻女子大学千代田キャンパス

[講演・その他の社会活動]

- 古河街角美術館企画展「境界を超えるアート」金田卓也氏（大妻女子大学家政学部児童学科児童教育専攻教授）とのトークイベント「伝統・アート・教育」、2023 年 10 月 28 日、古河文学館
- 目白大学短期大学部「芸術と文化の理解」担当（非常勤講師）、2023 年 12 月 1 日～2024 年 1 月 12 日、目白大学新宿キャンパス・研心館研修室
- ホリスティック教育/ケア学会理事

【2023 年度の予定】

外国語教育におけるホリスティックアプローチ

ABR(Arts-based Research)研究に根ざした教育方法の探求

【この 1 年、外国語教育についての雑感】

今年度は学会でのシンポジストや非常勤講師としての連続講義を経験することができた。生涯学習としての外国語教育を考える上で、AI 機能の進歩は日本人の語学学習のモチベーションや方法を変化させているように感じる。その活用法を研究所の講演会や先生方の実践から学ぶとともに、近年日本語がまるで論理を司る英語のように批判やエゴの道具として飛び交っている状況をみて、言霊を大事にする日本語の在り方も含め、外国語を学ぶことの意義と重要性を改めて見直していきたいと考えている。

2023 年度研究員名一覧および研究課題

浅岡 千利世	所長／外国語学部英語学科 教授	Narratives of successful language teachers: Through forming a collaborative community of practice of language teachers
三谷 裕美	主任研究員／法学部法律学科 准教授	外国語教育における小・中・高・大学連携と自律学習者育成
浅山 佳郎	国際教養学部言語文化学科 教授	1. 中国彝族自治区における日本語学習を含む外国語学習の状況について 2. 日本語のカートグラフィーにおける Topic と Focus の位置について
岡田 圭子	経済学部経済学科 教授	外国語学習における高大連携
中村 公子	外国語学部フランス語学科 教授	1. 「フランス語科教科教育法」の授業内容と指導法の再考 2. 「(外国語の) 教科教育法」担当者としての教師教育者に必要な資質と能力
Marco RAINDL （マルコ・ラインデル）	外国語学部ドイツ語学科 准教授	Looking for (inter-)action – How do Japanese learners of German make use of tandem apps such as Hello Talk and Tandem for improving their communicative compentencies in the target language
小宮 秀陵	国際教養学部言語文化学科 准教授	「複言語主義」の理念をふまえ、中・高・大の言語教育をより良いものにする方策を考える
明田川 聡士	国際教養学部言語文化学科 准教授	初級中国語授業における高大連携の問題点と改善策
渡邊 一弘（客員研究員）	京都大学文学研究科 特定研究員	多様化する能力観の時代における EGAP 教育の再定位
辻田 麻里（客員研究員）	国際基督教大学アーツ・サイエンス学科 准教授	日本の中学校・高等学校の教員から見た英語教育の問題点
曲木 威古（客員研究員 2023 年 7 月迄）	西昌学院彝語文化学部講師	言語人類学的観点から見た彝語の記号学的な形態と観念
市原 ひかり	外国語学部英語学科 特任助手	外国語教育におけるホリスティックアプローチ

2023 年度　外国語教育研究所活動報告

4 月 26 日（水）	第 1 回（通算第 86 回） 研究所連絡会	・2023 年度研究所活動計画について ・2023 年度研究員活動計画について ・第 13 回公開講演会について ・研究員の役割分担について ・HP 更新について ・その他
5 月 31 日（水）	第 2 回（通算第 87 回） 研究所連絡会	・2022 年度収支について ・2023 年度予算について ・第 13 回公開講演会について ・研究所紀要作成について ・その他
6 月 17 日（土）	外国語教育研究所主催 第 13 回公開講演会 ※対面・Zoom ウェビナーのハイブリッド形式にて開催	「日本に複言語主義は必要か？―ヨーロッパとの対比で―」 挨拶　外国語教育研究所所長　浅岡 千利世 1. 基調講演 ＜講演者＞ 境 一三（外国語学部ドイツ語学科特任教授・慶應義塾大学名誉教授） 2. 質疑応答 ＜モデレーター＞ 三谷 裕美（外国語教育研究所主任研究員）
6 月 28 日（水）	第 3 回（通算第 88 回） 研究所連絡会	・第 13 回公開講演会について（報告） ・研究所紀要作成について ・2022 年度事業報告書作成について ・その他
7 月 26 日（水）	第 4 回（通算第 89 回） 研究所連絡会	・2022 年度事業報告書作成について ・その他
	第 1 回（通算第 34 回） 研究例会	獨協大学における日本語教育 ＜発表者＞浅山 佳郎（外国語教育研究所研究員）
10 月 25 日（水）	第 5 回（通算第 90 回） 研究所連絡会	・研究所紀要作成について ・その他
11 月 22 日（水）	第 6 回（通算第 91 回） 研究所連絡会	・第 13 回高大懇話会について ・研究所紀要作成について ・その他
	第 2 回（通算第 35 回）	獨協大学韓国語の歩み

	研究例会	―日本の諸大学の韓国語関連学科設立とあわせて― ＜発表者＞小宮 秀陵（外国語教育研究所研究員）
11 月 30 日（木）	事業報告書の発行 ※PDF データにて作成・HP へ公開	「獨協大学外国語教育研究所 2022 年度事業報告書」(Annual Report of the Institute for Research in Foreign Language Teaching Dokkyo University)
1 月 24 日（水）	第 7 回（通算第 92 回）研究所連絡会	・第 13 回高大懇話会について ・紀要作成について ・第 14 回公開講演会について ・その他
	第 3 回（通算第 36 回）研究例会	日本における中国語教育の変遷 ＜発表者＞明田川 聡士（外国語教育研究所研究員）
2 月 17 日（土）	第 13 回高等学校外国語担当教員との懇話会	＜高等学校外国語担当教員＞ 岡見 英一（獨協中学高等学校） 後藤 範子（元埼玉県立不動岡高等学校） 鈴木 冴子（埼玉県立上尾鷹の台高等学校） 祖谷 侑沙（埼玉県立伊奈学園総合高等学校） 能登 慶和（獨協医科大学/東京都立北園高等学校） 廣瀬　瞳（埼玉県立坂戸高等学校） 松田 雪絵（埼玉県立和光国際高等学校） 山崎 夏絵（埼玉県立越谷南高等学校） ＜外国語教育研究所研究員＞ 浅岡 千利世（所長） 三谷 裕美（主任研究員） 岡田 圭子 Marco RAINDL 辻田 麻里（客員研究員） 渡邊 一弘（客員研究員） 市原 ひかり
3 月 31 日（日）	紀要の発行	『獨協大学外国語教育研究所紀要』 第 12 号（Dokkyo Journal of Language Learning and Teaching, Vol.12）

獨協大学外国語教育研究所規程

平成23年４月１日
施行

第１条　獨協大学（以下「本学」という。）本学に獨協大学外国語教育研究所（以下「本研究所」という。）を設ける。

第２条　本研究所は、外国語及び外国語としての日本語（以下「外国語」という。）教育に関する調査及び研究を行い、本学及び社会の発展に寄与することを目的とする。

第３条　本研究所は、前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

（１）　外国語教育に関する資料収集、調査及び研究
（２）　外国語の教授法の研究及び開発
（３）　外国語の教材の開発及び出版
（４）　外国語能力の評価基準に関する研究
（５）　大学における二言語併用教育の方法及び成果に関する研究
（６）　外国語教育の成果に関する追跡調査
（７）　他の教育機関及び研究機関との交流、連携及び共同研究
（８）　受託研究及び受託調査の実施
（９）　研究及び調査の成果の発表及び刊行
(10)　研究会、講演会その他シンポジウムの開催
(11)　その他本研究所の目的達成に必要な事業

第４条　本研究所に所長をおき、本学の専任教員をもってあてる。

２　所長は学長が任命する。

３　所長は、本研究所の業務を統括する。

４　所長の任期は２年とし、再任を妨げない。

第５条　本研究所に研究員若干名をおく。

２　研究員は本学専任教員の中から所長が指名する。

３　研究員の任期は２年とし、再任を妨げない。

４　研究員に関する内規は、別に定める。

第６条　本研究所に主任研究員をおき、研究員の中から所長がこれを指名する。

２　主任研究員は、本研究所の運営に関して所長を補佐する。

第７条　本研究所に客員研究員をおくことができる。

２　客員研究員に関する内規は、別に定める。

第８条　所長は本研究所の運営に関する事項を審議するため研究所連絡会をおく。

２　研究所連絡会は、所長、主任研究員及びその他の研究員をもって構成する。

第９条　所長は、当該年度の事業の状況並びに予算及び事業計画について年度ごとに部局長会に報告しなければならない。

第10条　本研究所に事務職員をおく。

第11条　この規程の改廃は、全学教授会の審議を経て学長が行う。

附　則（平成22年規程第33号）

１　この規程は、平成23年４月１日から平成29年３月31日までの間、施行する。

附　則（平成26年規程第14―116号）

２　この規程は、平成27年４月１日から平成29年３月31日までの間、施行する。

附　則（平成29年規程第１号）

３　この規程は、平成29年４月１日から平成35年３月31日までの間、施行する。

獨協大学外国語教育研究所　2023 年度事業報告書

発行日	2024 年 11 月 30 日
発行者	獨協大学外国語教育研究所（通称: AMANO 外国語研究所） 〒340-0042　埼玉県草加市学園町 1-1 TEL 048-946-1846 / FAX 048-946-1846 https://www.dokkyo.ac.jp/research/amanoken/